

2023年8月20日 礼拝説教要旨

ハイデルベルク信仰問答講解説教Ⅱ 11 「罪からの救い」

イザヤ43：11～15、マタイ1：20～23

問29なぜ神の御子は「イエス」すなわち「救済者」と呼ばれるのですか。

答 それは、この方がわたしたちをわたしたちの罪から救ってくださるからであり、唯一の救いをほかの誰かに求めたり、ましてや見出すことなどできないからです。

ここではイエス・キリストの「イエス」という名前を取り上げています。「イエス」はこの問答が示すように「救済者」という意味があります。神さまは愛する御子を「救済者」として世にお遣わしになられました。それはすでにこの信仰問答で見てきましたように、このお方が仲保者として、わたしたちの罪を赦し、わたしたちを神さまの御前に義、正しいものとするという特別な任務を行われるためです。これについては問18にこのようにあります。

問18それでは、まことの神であると同時に、まことのただしい人間でもある、その仲保者とはいったいどなたですか。

答 わたしたちの主イエス・キリストです。この方は、完全な贖いと義のために、わたしたちに与えられているお方なのです。

完全な贖いと義、そこに神さまが求めておられる救いがあります。その救いゆえに神さまの御子は「イエス」(救済者)と呼ばれるのです。そのことは答えのところにも明らかにされています。「それはこの方がわたしたちをわたしたちの罪から救ってくださるからであり」とありますが、この「罪からの救い」それが完全な贖いと義であり、聖書が示す救いです。そしてその根拠となる聖書が今日読みましたマタイによる福音書の箇所です。天使はヨセフに「マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである」(マタイ1：20～21)と言いました。自分の民を罪から救う、そこに神さまの御心があり、それを与えるのはイエス・キリスト以外には誰もいないのです。

では改めて罪とは何でしょうか。カール・バルトは罪について「人間の傲慢」と説明しています。そしてこの傲慢な状態をイエス・キリストに照らし合わせながら4つの点から見ています。一つは、キリストは神さまであるにも関わらず人となられますが、人間はそれに反して神の如くなるとうとする。二つ目は、キリストは仕える者、僕になられますが、人間は主人になろうとする。支配しようとする。三つ目は、キリストは十字架であえて裁かれる者となられますが、人間は自ら裁く者となります。神さまを裁き、人を裁く。四つ目は、キリストは十字架で自らを投げ打ち全く助けのない状況に身を置かれましたが、人間は自ら自分を助けられることができる。自分を救済者だと考える。それゆえに人間の罪は傲慢であるというのです。(寺園喜基著『カール・バルト《教会教義学》の世界』186～190頁)

この傲慢ゆえに人間は苦しむのです。いつも誰かを支配し誰かに支配され、裁き裁かれ、そして自分で自分を救おうと必死にもがいている。それが自ら神の如くなるとうとする結果です。その傲慢さゆえに人間は唯一の救済者であるイエスさまを信じることができず、イエスさまを否定していくのです。それは問30です。

問30それでは、自分の幸福や救いを聖人や自分自身やほかのどこかに求めている人々は、唯一の救済者イエスを信じていると言えますか。

答 いいえ。たとえ彼らがこの方を誇っていたとしても、その行いにおいて彼らは唯一の救済者また救い主であられるイエスを否定しているのです。なぜならイエスが完全な救い

主ではないとするか、そうでなければこの救い主を真実な信仰をもって受け入れ、自分の救いに必要なことすべてをこの方のうちに持たねばならないか、どちらかだからです。

ここでは救いをイエスさま以外に、つまり聖人や自分自身やほかのどこかに求めようとする人間の過ちが指摘されています。「聖人」という言葉が出てきましたが、ローマカトリック教会では信仰者として特別の働きがあった人を会議で「聖人」とする制度を持っています。例えば、マリヤや洗礼者ヨハネ、ペトロなどの使徒たち、最初の殉教者ステファノ、福音書を書いたマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネなど、彼ら聖人の功績にあやかれると考えます。イエスさまは近づき難く、恐れ多いけれど、そういう人たちなら身近に自分たちをとりなしてくれるだろうと考えるのです。でもそれは結果としてその人たちを神さまに近い存在として崇めることになりました。プロテスタント教会は人間を特別視することを警戒します。それは人間を神格化することに繋がるからです。

さらに自分の救いを「自分自身やほかのどこかに求めている」とあります。例えば自分が熱心に何かをすることで救いに近づくと考える。立派な行いをすれば自分の救いは確かなものになると考える。それはイエスさまの時代もそうでしたし、カトリックもプロテスタントでもそういう誘惑があります。それも高慢以外の何ものでもありません。それは結果として唯一の救済者であるイエスさまを否定することにつながります。罪の中にある人間は自分で自分を救うことなどできません。罪のないお方イエスさまに救っていただくしかないのです。でもわたしたちはよほど注意していないと、すぐにもそういう思い上がり、高慢な思いに支配されてしまい、唯一の救済者であるイエスさまを見失ってしまうのです。

信仰問答では「自分の救いに必要なことすべてをこの方のうちに持たねばならない」と言います。イエスさまの中に救いに必要なことすべてがある。完全な罪の赦し、贖いと義があるのです。使徒言行録に「ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです」(4:12)とあります。十字架で命を献げられ、三日目によみがえってくださったお方が、わたしたちの救いに必要なすべてを備えてくださったと素直に信じて受け入れる信仰が求められています。しかしそれはわたしたちの力で成し得るのではなく、恵みとして与えられるもの、「福音を通して聖霊がわたしのうちに起こしてくださる心からなる信頼」(問21)なのです。

天の父よ。わたしたちの思い上がり、高慢によって、唯一の救い主であるイエスさまを見失ってしまう誘惑があります。神さま、どうぞそのような罪からわたしたちを自由にしてください。高慢を打ち砕いてください。聖霊がわたしたちのうちにあなたの救いを受け入れる心からなる信頼を与えてくださいますように。主の御名によって祈ります。アーメン。